

あちらこちら文学散歩（第三回）

井本元義

「八」ランボーの家出　パリへ

千八百六十九年は、ランボー一家がシャルルビルの最後の家に引越した年である。先の「七」で書いたように彼にとつても、彼に興味がある人にとつても忘れ難い家だ。千八百九十五年に最愛の妹が死んで一家がそこを去りロッシュ村へ帰るまで住んでいた。そこはまた彼の自意識の発露がもはや抑えられなくなり、最初の暴発をおこし矛盾と錯乱を育てた家でもある。度重なる家出と初めてのパリの猥雑な混乱の世界を味わつては帰つてきた家でもあつた。不可解な魅力にあふれながら無意味なパリから戻ってくるのもこの家だつた。まだ十五歳の少年でありながら、真実の美に目覚めそれに喰らいつき雄叫びを挙げたのだつた。そして真の虚無が彼の身を刺し貫いた家でもあつた。十五歳の夏、彼はついに初めての家出をする。十八歳ともなれば出奔であつても、十五歳の少年のそれはただ家出と言われても仕方がない。

千八百六十七年にボードレーが死に、翌年「パリの憂鬱」が出版された。ボードレーを尊敬していた彼がすぐに読んだかどうかはわからない。だが、それも抑えたい動機だつたらう。その年までは不満と反抗の日々、母親からの平手打ちに耐える日々だつたが、大きな機会が訪れた。文学青年の若き教師のイザンバールの着任だつた。学校で数々の受賞に輝き図書館員も驚く読書に浸つていたランボーにとつては、先生というよりちようどいい相手の兄貴分だつたらう。イザンバールも彼の才能に驚き面倒を見る。互いについて影響を与え合う。母親にとつては悪い影響ではあつたが。

また、ふざけ合つたりした弟分のような友人のドラエーとシャルルビル駅前のカフェ「ユニヴェール」でパリ行の汽車を眺めながら聞いていた汽笛は、もう彼の体をそこにはとどめたままでは響かなかつた。夏も終わるころ、彼はいきなり家出する。初めてだつた。

仏独戦争がはじまり、初めは優勢だつたフランスはすぐに劣勢になる。ランボーは不運だつた。シャルルビルからパリ行の交通は遮断されていた。やむなくベルギーのシャルルロワ経由でパリへ向かう。当然汽車賃は高い。パリに着いた彼は運賃不足で留置所に収容される。イザンバールに助けを求め、やつとシャルルビルへ帰る。

このカフェ「ユニヴェール」は、いまでも駅前の公園の端にある。普通の店だ。外にいくつかのテーブルもある。公園には音楽堂がある。娯楽施設もなかつた頃は、涼しい夕方には人々が集まる唯一の場所だつたらう。彼の父のランボー氏

と母親が会ったのもここだったろう。ランポーの詩にもこの音楽堂が出てくる。

家出に失敗して、初めての帰還に意気消沈してこの前を通つたのだろうか、あるいはふて腐れてか。だが一ヶ月も過ぎると彼の勢いはさらに増す。二度目の脱出で彼はプリュツセルに着く。イザンバールの親戚の家でふてぶてしく読書の日を送っているが、今度は母親の依頼でイザンバールが警察に届けるしかなくなる。あえなくそれも挫折だ。この間、フランス第二帝政が崩壊。シャルルビルもプロシヤ軍に占領される。

それでも彼が生きていることは詩そのものである。いくつもの詩を書きながら彼はさまよう。詩が求める方向に彼の足は止まらない。彼の呼吸が詩である。彼の向かう方向が新しい詩の光だ。

家出の途中で書きなぐつた詩の数々は、友人や先生、またはパリの偉い詩人たちに送っている。いわゆる彼の「初期韻文詩」と言われている。多くはソネである。まだ新しい詩というわけでもない。ソネというのは、四行、四行、三行、三行の節に別れた十四行の古典的な詩の形である。それぞれの一行は発音が十二音節に整えられ、最後の言葉は韻でまとめられる。この制約の中で言葉を選び、意味をつけイメージを浮かべ表現する。これらの詩をまた十五歳の少年が見事に書いている。それもごく自然に。たとえば、パリを指ししながらシャルルロワへ着いた時の詩の最初の節。

AU CABARET-VERT

Depuis huit jours, j'avais déchiré mes bottines
Aux cailloux des chemins. J'entraîs à Charleroi.
— Au Cabaret-Vert : je demandai des tartines
De beurre et du jambon qui fût à moitié froid.

居酒屋みどり亭にて

八日この方、石ころ道を、歩き続けた僕の靴
すっかり破れてしまつた。シャルルロワへいま着いた。
「居酒屋みどり」で僕はまず

トーストとハムを頼んだ、ハムはどうやら冷えていた

訳 宇佐美斉

詩の内容はどうということはない。だが各行は十二音節の発音の母音の数、一行目と三行目のティンヌという音、二行目と四行目ロワという最後の言葉の音は同じ音、韻である。読んだり聞いたりしても心地よい。これらをなんの苦勞もなく書きなぐっている。

彼の脳裏には言葉が嵐のように吹き荒れ、映像が飛び交い、それらを吐き出さずには体が壊れてしまうというばかりだったに違いない。やがてそれは幻影になり錯乱し、色まで

加わつて宙に舞いあがる。しかし二十年後にはそれらは漆黒に変わり雨に打たれ、そして乾ききつて塵になつて砂漠の闇に消えるのだ。

シャルルロワ、十五歳の少年が生き生きと家出の旅を楽しんで、パリを目指している。かなりの遠回りだが気にしない。ランボーファンなら一度は訪れたい場所だ。みどり亭、何と楽しい居酒屋だ。当時は壁も家も部屋も家具もどこもかしこも緑に塗りたくつていたらしい。そして百五十年前から何度もリニューアルされてホテルになつて現在もあるらしい。緑色かどうかは知らない。名前は「ホテル エスペランサ」。「みどり」の象徴は「希望、エスペランサ」だということだ。まさに名前も伝統を引きついている。いつか行つてみなくてはならない。ブリュッセルの南の方らしい。かつては石炭が取れた。今は工業都市で、発展している。人口二十万。あるベルギー人に話したら、あそこは治安が良くないよ、ということであつた。

「九」しばしのバリ滞在

三回目の家出は翌年の晩冬のバリ。体が止まらないのだ。ただし一ヶ月も経たないうちに彼は帰る。寒い中、直線ではぼ三百キロメートルのラリーシャルビルを徒歩で帰宅だ。ボロ布をまとい、咳が止まらない、何か月も延ばし放題の髪、惨めな様。この時の家出は彼に一つの変つた経験を与えた。

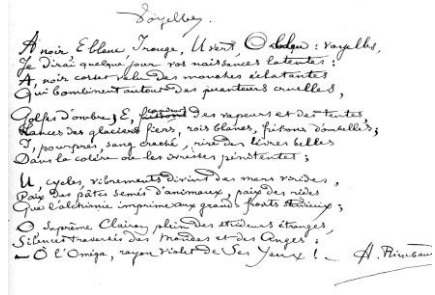
知人に送つた詩が出版社に届いているはずだつた。そこで歓迎されて華やかなパリが彼を待っているはずだつた。だが誰にも会えず、彼は独りきりだつた。それでも昼は本屋を回り面白い本を探すが、夜には泊まるころもない。セーヌ川に停泊している石炭運搬用の船底にもぐりこみ寝る。腹が減つたら、人気のない路地のごみ箱を漁る。ニシンの燻製をボケットに入れて少しずつちぎつて、それが最後の食事だ。フランス軍はプロシヤ軍に敗北して、パリの西部の占領を承諾するが、民衆はデモで反対を叫ぶ。赤旗の乱立する混乱の中、彼はただ徘徊するだけだ。そして誰もが飢えている。ある時、彼は女乞食に救われたこともあるに違いない。食事を分けてもらい、寒さに負けてその肌で温めてもらったこともあるのではないか。僕は勝手に想像する。なぜなら、母音というその詩、ソネの最初の節。色に変えられた母音は幻影の破片となつて無尽に飛び交う。

母音

Aは黒 Eは白 Iは赤 U緑 O青よ、母音らよ
いつの日かわれ語らばや、人知れぬ君らの生い立ちを
Aはそも、痛ましき悪臭に舞いどうろ銀蠅の
毛羽たてる黒の胸衣よ、黒き入江よ。

.....

彼はそこで打ちひしがれる男ではない。帰郷後一週間、政府に反抗してパリに労働者の自主政権「パリ・コミューン」が成立したと聞いた彼はもう待てない。千八百七十一年、誕生日前の彼はまだ十六歳である。駅前のカフェに座ってパリからの列車が着くたびに、だれかれとなくパリの状況を尋ねる。誰とも激論を交わす。新聞を貰う。「やっただぞ、秩序は打ち負かされたのだ」学校は閉鎖されたままだ。どちらにせよもう行っていない。母親からは、もう面倒は見ない、と告げられる。吉報もあった。コミューン派が賃金を払って兵士を募集しているということだった。もう暖かくなっていた。彼はパリへ向かう、徒歩と通りかかった荷馬車に乗せ



ランボオ「母音」の詩 自筆

てもらったようだ。政府軍とプロシヤ軍に嚴重に監視されたパリではあったが、市内のいたるところではバリケードが引かれ、市役所はコミューン派の事務所だった。方々で小競り合いが続いていた。いつ政府軍がコミューン派の掃討作戦に出るかわからない日々だった。

このあたりの物語は僕の小説「ロツシュ村幻影 その日のアルチュール」に詳しく書いた。これはフィクションとノンフィクションを混ぜたものである。例を挙げる。

「四月になって彼は出発した。・・・兵士になって身を投げ打つ積りはなかったが、力は有り余っている。なによりも混乱を内包する美しさ、動乱に蹂躪されながら毅然とそこにあり続けるパリの美しさ。それを守るため、そこで俺の詩を輝かせるために俺は行かねばならない。歩きなれた三百キロの道は時々馬車を拾えばそう遠くはない。

気持ちのいい気候だった。夏の夕暮れに僕は小道を行こう、そして遠くへ、はるか遠くへポヘミアンのように、と詩を書いたのは昨年だった。今その歩調は規則正しい音節とともに進んだ。頭の中の言葉はそれに同調した。勝手気ままに乱舞していた言葉は整列した。いくつも詩が出来た。おお、五月よ。彼は楽しかった。彼は野宿しまた歩いた。

夕方になる前に彼は北の城門に着いた。コミューン兵士に通行許可証を求められたが、彼は誇らしげに言った。ない、参加するためにアルデンヌ県から歩いてきたのだ。一瞬兵士は驚いたが、まわりから、いいぞ小僧、と歓声が上がった。

パリのマロニエは何時もの年より早く多く咲いた。貧しい

アパルトマンの壁にも蔓を張った藤は、甘い香りを漂わせてそよ風に揺れていた。街路樹の桐の花は紫の美しい雲のように通りに連なっていた。

まず軍服を渡された。・・・。」

しかし下級の兵士たちの兵舎の中は驚くほどの無秩序だった。元兵士、水兵、やくざ者、の寄せ集めだった。葡萄酒と煙草の匂いに満ちた兵舎に寝泊まりしなければならなかった。しかも命令が下りるまでは何もすることはなかったのだ。市役所の司令部では毎日議論が戦わされ、混乱もしていた。兵舎で彼は刺青の荒くれ男たちに凌辱される。嫌悪と屈辱の日々だ。スーブのゲロを吐きかけられながら彼は嘲笑される。もう逃げるしかない。一ヶ月も経たないうちに彼は兵舎を去る。

五月の半ばにはコンミュンは政府軍に崩壊される。街中が血生臭く、セーヌ川は血で染まる。大勢の人々が虐殺され、また報復のためにその死体が足蹴にされた。パリは大きく破壊された。

このあたりには様々な記述も伝説もある。ランボーにとても政治的な意味よりも重要なことのある一時期である。かつての先生、兄貴分へ手紙を書く。有名な五月十三日の手紙である。この手紙をどこで書いたかを知りたいがまだわからない。シャルルビルには間違いないようだが、デュテルムかユニヴェールか。逃げて帰ってきたにもかかわらず、政府軍の弾圧が始まると彼の最後の情熱がきかたてられる。「狂ったような憤怒が・・・」と彼は書くが、次第に内部では詩

への情熱が政治的なそれを追い払ってしまおう。しばらく会っていないイザンバルへ、皮肉あるいは挑戦的な手紙を出すのだが、これが今も語り続けられている「見者」への宣言だ。「今のところ、放蕩の限りを尽くしています。なぜかとおっしゃるのですか。僕は詩人になりたいのです。そして見者になろうと努めています。貴方には何のことかさっぱりお分かりにならないでしょうね。僕だって説明には苦労します。あらゆる感覚を放埒奔放に解放することによって、未知のものに到達することが必要なのです。・・・。」

また十六歳の天才少年である。



パリ13区制立150周年の写真
より
パリコンミュンの兵士

ランボー研究者や愛好者はこの辺の沢山の文献、研究書を多分読んでいるだろうし、さらに興味のある人にはそれらの本に任せたい。この文章はあくまで文学散歩なので、その辺りの周辺をうろつくことである。そして何かのインスピレ

ーションを受ければ、それがありがたいのだ。

僕が住んでいたパリの八階の屋根裏部屋の天窓を開けるとパンテオンの屋根が見えた。そこからリュクサンブール公園へスフロ通りが続く。この通りもパリケードで固められ、多くの血が流された。通りの向かいがパリ大学の法学部でその先に図書館がある。多くの学生が並んでいたりする。僕も参考にとり思って並んでみた。係りに何か言われたので、ウイと答えると別の方を指された。その受付で何もわからないまま写真をとられ、いくら払うとすぐに写真付きのカードを渡された。これで自由に出入りが出来るようだ。何とていういい気分。

中はうす暗く落ち着いた、いかにも歴史がある雰囲気だ。広い部屋すべて木製の古い机に椅子。部屋の奥まで並んだ暗緑色の笠の下の柔らかな白熱灯。足音を立てずに本棚を見て回っていると、そこに「パリ・コンミュン」という本が眼についた。僕はまたコンミュンについてあまり知らない頃だった。またランボーの話を書こうと思い始めたころだった。嬉しくなつて僕は毎日そこへ通つた。電子辞書で単語だけでもなぞつていくと大体の意味はわかる。その日のパリの天気、市内の状況、政府軍の進軍、市内戦の激しさ、虐殺の様など。初めてのことばかりだった。詳しく書いた僕の作品「ロツシユ村幻影」に大いに参考になったことは言うまでもない。

「連帯者の壁」とも「嘆きの壁」とも言われる壁のことも初めてだった。一週間の戦いの後、銃弾も尽きて追い詰められたコンミュンの兵たちが、最後に逃げ込んだのがペーラ

・シェーズ墓地だった。投降した兵士たちは百四十七名、墓地の一面の壁に立たされ、無抵抗のまま乱射の銃で殺された。中には少年や、パリケードの中でサ克蘭ボを配っていた少女もいたらしい。「サ克蘭ボの実る頃」という歌はコンミュン時のものだと思つてはいたが、初めて壁のを知るのと具体的に胸を打つものがあつた。シヨパンやエディト・ピアフの墓を何度か訪れたが、改めてその壁に貼られたプレートに祈りを捧げに訪れたことは言うまでもない。

二十一年、パリ・コンミュン百四十年記念展というのが市役所であつた。丁度その時にパリにいたのは幸運だった。写真、新聞、手紙、絵、ポスター、ピラなど様々なものが展示してあつた。墓地の壁の前に兵士や女や少年が立たされている絵もあつた。その後、彼らは政府軍に虐殺される。入り口には長い列が出来ていた。千八百七十一年五月、この市庁舎も大きく破壊されたのだった。

十年程前だったろうか、モンパルナス墓地で、ボードレールやサルトルの墓回りをしている時、偶然に記念碑を見つけた。パリコンミュンの思い出「記念？」だったか、何か彫つてあつた。詳しくは忘れたが、兵士のためにと書いてあつたようだ。ただ何年に建てたとかどが建てたのかも記していない。そして真つ白で新しい。最近建てられたということとは、例えば百年目の記念というならばわかるが、今から三十年前だからそれにしては新しい。コンミュンの拠点であつたモンマルトルとか、ほかの各所にもこんな記念碑はある

のだろうか。あちこちに造りつづけているのだろうか。右寄り、左寄りの意見さまさまたるうが、政府に反抗して、世界で初めて労働者の自治政府を、小さくてもすぐに滅びたにせよ、創つた歴史を誰もが記憶に残し誇りとして抱いていることがわかる。

「十」 出奔

十六歳とはいえ、彼はもう青年になつてゐる。見者、詩人の誕生である。パリ・コンミュンから逃げて来たけれど、自信に満ちた彼にはもう恐い物はない。汚い格好の彼は誰も気にしない。シャルルビルをのし歩く。まだプロシヤ兵もいる。あたりを見回して歩くだけで誰彼となく侮蔑を投げつけるかのようだ。しかしある時は背筋を伸ばし一点を見つめ直つて直ぐ歩く。まるで幻視者のようだと言つて書いてゐる。前章で述べた、かつての教師、兄貴分イザンバルへ送つた「見者の手紙」やいくつかの詩も、この時期にカフエに座つて書いたものだ。ビールと煙草。親友のドラエーとの散歩と語り合い。図書館の本は読み尽くさんばかりだ。市内の本屋ではこっそり盗んで読んで返す、その繰り返し。近所の親父たちは、彼を見て嘲る。「あれが、浮浪者のアルチュールだ、コンミュンの生き残りで、めちやくちやな役立たずさ。」

この頃の詩は少年の澁刺とした感覚の発露から変わつて、確かに見者詩人としての力強さと深みが出てゐる。「刑苦の

心」「パリの乱痴氣騒ぎ」などパリ・コンミュンの経験が書かれてゐる。権力への反抗と侮蔑、新しい光への憧憬。ボードレールの真似をして散文詩も試みたと言つてある文献もある。後の「地獄の季節」の前哨である。

だがわれらが青年「少年？」天才詩人も、まだやはり母親が怖い。いつも叱られ文句ばかり浴びせられる。次の出奔のチャンスを待つてゐる。もう今度出かけたら再び帰つて来る事はないだろう。それだけではない。体が疼いてもうどうしようもなくなつてゐる。焦りは反抗心になり、ドラエーの教師や教会へ荒々しく投げかけられる。道で司祭に出会うと罵声を浴びせ喧嘩を売る。現状を極端にでも荒々しく斧で断ち切る行動をしなければならなかつた。

彼は丁度その時、面倒見のいいブルターニユという親爺に出会う。彼は数少ない理解者である。彼が言う。「そういえば昔、ヴェルレーヌという詩人に会つたことがあるな、まだ俺を覚えてゐるはずだが。彼に詩を送つてみるか」

あの尊敬するヴェルレーヌ、高踏派の詩人、願つてもないチャンスだつた。彼は躍りあがつて喜んだ。いくつかの詩を清書し、書きかけの詩をまとめた。名作「酔いどれ船 バトイーブル」はこの時このシャルルビルで書かれた。文学界へ衝撃的なデビュウの詩だ。夏の熱い日々だつた。カフエで部屋で彼は没頭した。十六歳でこれほどの素晴らしい詩を書くことが出来るのは古今東西で彼一人である。十二音節の四行が二十五連ならんだ百行の詩だ。リズムに韻にイメージにすべてが完璧である。

まだ彼は一度も海を見たことがない。だが大海に翻弄されながら、船は虚無の暗黒を目指して漂流するのだ。酔っ払っていても激しい情熱と冷静な観察を持つて自らの破滅への旅を欲するのだ。数行を羅列する。

・ ・ ・ ・ ・
 猛りどよめく大海の潮の前に

・ ・ ・ ・ ・
 本土と切れ海底へ陥ち沈むべき半島なりとも
 かかる激しき渾沌にかつて揉まれし事やある
 朝な朝なの海の上のわが目覚めをば風の祝いぬ
 ・ ・ ・ ・ ・
 安葡萄酒が汚点を、こびりつく反吐を吐けば
 わが身より濯ぎ去り、舵もはた錨も失せぬ
 ・ ・ ・ ・ ・

これよりぞ、我は星溶き流す乳色の

大海洋の詩のなかに身を浸したり

碧き空むさぼり眺め行くに

彼処、蒼ひかる喫水に隅々 黙々と水死者の骸

・ ・ ・ ・ ・

また彼処、こつ然と海の碧きを褐色に染むる

赤く輝く日の下の我かの様物狂い、調べ

・ ・ ・ ・ ・

我は知れり、稲妻に裂くる天を、竜巻を

・ ・ ・ ・ ・

我は見たり、神秘なる畏れに浸みたし夕焼けの

・ ・ ・ ・ ・

星放つ電光を浴び、黒き海馬に護られつつ

我こそは狂乱漂流の一板子にもあれ

時しもよ、七月の一杖一撃して打ちこわす

火炎の漏斗にも似し紺碧の天を

・ ・ ・ ・ ・

さりながら、げにも我あまりに哭きぬ。曙の身に疼し

月のなべては厭わしく、太陽のなべて苦しく

悲恋に酔える身は転に茫然たり

おお！竜骨よ、散り砕けよ、ああ、我は海に死なん！

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

訳 堀口大学

詩を送った後イライラしながら待つていた彼の下へやつとヴェルレーヌからの返事が届く。

「この素晴らしい詩人を迎える準備をしています。・・・。私もあなたの狼狂症の匂いを持っています。・・・。」

これも残っている有名な手紙だ。文献によると「狼狂症とは何よりも環境に順応しない者、社会を卑しむべきもの」と考え、それにあらゆる非難を浴びせ反抗する・・・・。」

二つ目の手紙もまた有名なものだ。パリまでの旅費とし

て為替も入っている。パリの高踏派詩人たちから集めたカンパだった。

「来たれ、親愛なる偉大な魂よ、皆が貴兄を待っている。」
もはやなにを躊躇することがあろうか。煩わしいものはすべて捨てる。

九月のシャルルビルルの空は晴れやかに広がり、空気は軽やかで暖かかった。すべてが自由と希望を感じさせてくれた。見送りは親友のドラエー一人だけだ。駅前のカフェユニヴェールで別れのビールを飲む。彼は興奮のあまりこう呟く。

「今までにこんなものを書いたものは誰もいない、それはわかつている、だけど、あの教養人たちの世界、社交界、上品な物腰、僕はどう振る舞ったらいいんだ、僕は不器用だし……。」

「大いなる冒険」へむけて汽車が動き出す。光り輝く世界がその扉を開いて待っているのか、あるいはそこは暗黒の地獄の入り口か。傲慢な彼も少しは心の弱さを覗かす。

アルチュール・ランボーが十七歳になるにはまだ一ヶ月あつた。

追　パリ・コンミュンについては数々の逸話がある。また文献も多い。「大仏次郎　パリ燃ゆ」は長いが読み応えがある。画家クールベがヴァンドーム広場の円柱を倒し、コンミュン崩壊後逮捕されるが、殺されずに膨大な罰金を科せられスイスに亡命しそこで死ぬ。またヴィクトル・ユーゴーが亡命先から帰還し、選挙で再び国會議員に選ばれるのも

そのあとである。ボードレーヌは数年前に亡くなっている。テオドール・バンヴィルという高踏派の偉い詩人、ランボーが田舎から詩を送っていた詩人、あとで馬鹿にするのだが、は混乱のパリで泰然としていた。疎開していた人も多い。ヴェルレーヌは市の職員でありながらコンミュンのシンパだったというので、崩壊後もびくびくしていたという。マラルメがパリに来るのはコンミュン崩壊後だ。好きな芸術家がこの混乱のパリでどう過ごしたかを調べると面白い。

続く